

# 学会だより No. 88 2008年10月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

## 第69回哲学会大会のお知らせ

今秋は下記の要領で第69回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2008年10月19日（日） 10：00～16：45

会場：上智大学7号館14階特別会議室

## プログラム

研究発表 10：00～11：20

津田良生（本学博士前期課程）

ハイデガーにおける形而上学の概念

『存在と時間』直後におけるハイデガー思索の貫通的解釈に向けて

北川 恵（本学博士後期課程）

アウグスティヌス『音楽論』第六巻における「数」の認識について

特別報告 11：20～12：00

山崎裕子（文教大学教授）

アンセルムス『祈り』の言葉 聖母マリアに対する呼称をめくって

休憩

総会 13：00～13：20

講演 13：25～14：25

K・リーゼンフーバー（本学哲学科教授）

中世スコラ学における自己認識の問題

シンポジウム 14：35～16：45

テーマ：「現代に生きる中世」 日本における中世哲学研究の現在と将来

提題者：加藤信朗（東京都立大学名誉教授）

宮本久雄（本学神学部教授）

八巻和彦（早稲田大学教授）

司 会：中村秀樹（本学哲学科専任講師）

懇親会 17：30～19：30

会場：上智大学11号館7階会議室3

会費：3,000円

## 講演要旨

### 中世スコラ学における自己認識の問題

K・リーゼンフーバー（本学哲学科教授）

「自己」の概念は「主体」「自我」「人格（ペルソナ）」等とともに、近代哲学と現代の人間像の基礎を成していると言えよう。本講演では、近代の哲学と人間観の起源に遡り、中世スコラ学における自己認識の理論をその思想史的発展に沿って考察し、多様な学説に含まれる問題提起の諸契機を探ることによって近代の視野に向かって、あるいはそれを超えて自己理解の可能性と根拠に迫っていきたい。

中世においては、自己認識を促す聖書と教父の思想が主たる原動力となるが、視点と方法としては、アリストテレスに見られる感覚的認識の優先的位置づけとアウグスティヌスによる直接的自己認識の発見、という二重のアプローチはスコラ学者の問題意識の前提となる。11・12世紀の初期スコラ学において、まずカンタベリーのアンセルムスはアウグスティヌスにならない自己反省に基づいて神存在の証明を客観的なかたちで展開しようとしたうえ、ペトルス・アベラルドゥスは主体の自発的活動を言語的意味と倫理的行為の成立の場として主張した。彼のスコラ学への反論でクレルヴォーのベルナルドゥスは修道院神学の靈性に従い、自らの救いを配慮する人間の自己探求を第一の認識と超越へのかかわりの基盤とみなし、内面への転換を強調する。13世紀の盛期スコラ学においては自己認識の形而上学的構造が主題とされる。自我は「他のものと同様に」、つまり対象的なかたちで、しかも感覚的な対象の認識にともなって知られるというアリストテレスの主張と、思惟する個人的自我を普遍的・宇宙論的知性へと解消するラテン・アヴェロエス主義をめぐる論争が自己認識を哲学的に解明するきっかけとなった。ボナヴェントゥラは感覚的世界から自己へと立ち返り、自己認識を通じて超越的存在と善を知る道を展開しており、この新プラトン主義・アウグスティヌス主義的認識観を極端にまでも追求したオリヴィは、自我の直接的自己経験をあらゆる確実な思惟の担い手とみなす。トマス・アキナスはアリストテレスの対象中心的認識観に賛同しながら、自我が存在するという個人的経験の確実性と自我の本性に関する反省的・概念的認識の困難を指摘し、しかも対象認識を支える精神の習性的自己認識を認める。精神が自己認識において、いかに完全な再帰において自らの本性とその超越的な起源に遡れるかはアルベルトゥスとトマスの形而上学的認識論からフライベルクのディートリヒにおけるアリストテレスの能動知性論とアウグスティヌスの「魂の秘所」説を結合する思弁を通してエックハルトに由来する中世末期の神秘思想に至る問題となる。14世紀後期スコラ学においてはスコトゥスから始まって認識の確実性が問われ、それはアイデアや第一の諸原理だけではなく、それと平行し、またはそれと一致したかたちで精神的行為や自我の経験的ないし直観的自己所与に基づくとザクセンのアルベルトゥスなどに指摘され

るが、この直接的自己把握は命題による反省的自己認識に対して、オッカムやチャットンによって明確に区別される。15世紀に広く承認されるこの認識観は16・17世紀のイエズス会のスコラ学者たちに伝わり、「我、思う」を哲学的認識の原理とするデカルト哲学の受容に貢献したと思われる。

\*\*\*\*\*

## シンポジウム

### 「現代に生きる中世」

#### 日本における中世哲学研究の現在と将来

司会 中村秀樹（本学哲学科専任講師）

中世思想研究は、ヨーロッパの歴史の中で中心的な位置を占める時代の精神的営為を明らかにするものとして、ヨーロッパ思想の総体を理解するために極めて重要な役割を果たす。このような中世思想の位置付けは、地域及び言語圏によって相違はあるにせよ、現在のヨーロッパの哲学に対しても問題を提起し続けており、様々な形でそれに対する積極的な反応を見ることが出来る。そこでは近代以降の思想の意味を十全に捉えるために中世思想の理解が不可欠であるというような消極的な観点からだけではなく、近現代の思想が十分に展開していない主題を中世思想に見出し、それとの対話を通して哲学的思惟の新たな可能性を発見しようとする問題意識からの探求も行われている。

哲学が最も活発に営まれている地域の一つとしてドイツ語圏を例に取るならば、中世思想研究は発展を続ける包括的な中世史研究との関わりを一層深めており、そこで要求される学際性から絶え間ない刺激を受けている。この徹底した学際性は、重要な思想家の著作を校訂版として編集する際に特にその必要性を明らかにする。この学際性の要求は、中世という複雑な時代の思想を徹底して解明しようとする試みが、方法論的に数多くの課題を克服した上ではじめてその目的を達成し得ることを示しており、純粋に哲学的な関心からの探求に対しては厳しい挑戦として現れてくる。しかし中世哲学研究は、まさにこの様なアプローチにおいて、中世的思惟がそこで育まれた場の多様性と広がり直面するのであり、それは今日哲学することにおいても新たな展開の契機となり得るのである。昨今の厳しい出版事情にもかかわらず、中世思想に関する原典校訂版および翻訳・注解、研究叢書がいくつか新たに企画され、それに近現代思想の研究に積極的に関わる若手研究者も参与していることは、この様な動きの一つの現れと言えよう。また中世思想においてその中心に位置し、哲学と密接に関わる神学の側でも、2002年の国際中世神学会（I.G.T.M.: Internationale Gesellschaft für theologische Mediävistik）の設立が示すように、中世的思惟を厳密な学際性のもとで再検討し、その豊かな伝統から現代に

おける新たな可能性への示唆をくみ取り、それを哲学をはじめとした関連領域へ発信しようとする試みが見られる。

日本における中世思想研究は、近代哲学の受容とそれに続いた古代哲学研究の狭間にあって哲学的領域においては前面に出てくることはなかった。しかし中世思想の重要性と、その特有の問題設定に対する関心から研究は継続されてきており、それに対し本学哲学科はその設立の経緯および本学神学部への関わりから独自の貢献を行ってきた。この貢献はクラウス・リーゼンフーバー先生が本学哲学科に着任されたことによって新たな決定的な段階に入った。リーゼンフーバー先生は、本学を中心に他大学においても徹底的な中世哲学研究に立脚した教授活動を展開され、また中世思想研究所の多彩な出版活動を通して日本における中世哲学研究に新たな局面を切り開かれた。特に 2003 年に 10 年を費やして完成した『中世思想原典集成』全 21 巻は、ヨーロッパの思想史を根本から理解するために不可欠の邦語基礎資料であり、日本の哲学研究全体に対する影響も非常に大きい。今大会のシンポジウムでは、今年古希を迎えられたリーゼンフーバー先生の多大な業績を讃えつつ、先生と共に中世哲学研究に密接に関わりながら日本の哲学を導いてこられた三人の先生方、加藤信朗先生、宮本久雄先生、八巻和彦先生を提題者にお招きし、日本における中世哲学研究の意味と今後の課題について論じることとした。様々な形でリーゼンフーバー先生の活動に接して来られた上智哲学会会員の皆様と共に、先生への感謝をもって中世哲学研究という視点から日本における哲学の将来を考える機会となれば幸いである。

\* \* \* \* \*

## 特別報告要旨

### アンセルムス『祈り』の言葉

#### 聖母マリアに対する呼称をめぐる

山崎裕子（文教大学教授）

カンタベリーのアンセルムスは、言葉を厳密に用いた人物である。私たちはその一例を、聖母マリアに対する呼称に見ることができる。彼は体系的なマリア論を著してはいないが、『処女懐胎と原罪について』ならびに『祈り』の中に、聖母マリアに関する叙述が含まれている。

アンセルムスの『祈り』は 19 からなり、そのうち第 5 から第 7 の祈りが、マリアに捧げる祈りである。その各々の表題には、たとえば、「聖母マリアとキリストの愛を求めて、聖なるマリアに捧げる祈り」（第 7 の祈り）というように、「聖なるマリアに捧げる祈り」の前に文言を補い、各々の祈りの目的が明確化されている。第 5、第 6 の祈りに比べて第 7 の祈りが圧倒的に長く、第 5 の祈りがラテン語で 51 行、第 6 の祈りが 74

行であるのに対して、第7の祈りは199行に及ぶ。

アンセルムスは、イエスとマリアにさまざまな形容を与えている。そのなかでも画期的であるのは、一箇所のみとはいえ、マリアを「世界の和解者」(mundi reconciliatrix)と称していることであろう。というのも、神と世界を和解させる「和解者」(reconciliator)の呼称は、本来であれば、マリアにではなくキリストに帰せられるのがふさわしいからである。しかし、聖母マリアに対する他の呼称と合わせて比較すると、アンセルムスによるこの表現は、画期的であると同時に、言葉の緻密な使い分けに裏打ちされているように思われる。

報告では、アンセルムスがマリアをなぜ和解者と称したのかを、『祈り』における他の表現も含めて分析し、その特徴を考察してみたい。

\* \* \* \* \*

## 研究発表要旨

### ハイデガーにおける形而上学の概念

『存在と時間』直後におけるハイデガー思索の貫通的解釈に向けて

津田良生(本学博士前期課程)

M. ハイデガーは『存在と時間』(1927年)近辺の数年間、自らの思索を表示し特徴付ける語として「現象学」、「存在論」、「形而上学」といった様々な名称を使用する。そしてそれらの用語は、これもまたハイデガーの思索を史的に通覧する際に際立つ特徴であるのだが、ハイデガー自身の思索に冠する表題としては段階的に使用を停止されていく。このような表現の多様性とそれらの表現の段階的使用停止という事実は、しばしば後年の解釈において、ハイデガーの思索の段階的転換を示すものとして受け取られてきた(そのような解釈を示す古典的研究としては O. Pöggeler, *Der Denkweg Martin Heideggers*, 1963)。しかしながら、現象学、存在論、形而上学と言われるそれぞれの概念の内実及びその差異は何であるか、またそれらの差異がハイデガーの思索の内実如何に存しているのか、そもそも存しているのか否か、このようなことに関する明言的知見を提示する解釈は少ない。外面的な用語法の変化が何を意味するのか、このことは実際に展開された思索の内部から解釈される必要のあるものであり、この順序は決して逆転され得ないのである。

本発表では、1928年から30年頃までハイデガーにおいて積極的に使用された語の一つである「形而上学」に焦点を当て、該当時期の諸文献、とりわけ28年夏学期講義と29年公開講義「形而上学とは何か」を基に、ハイデガーが当の表題でもって示した問題圏域を顕わにすることを試みる。このことは当の時期におけるハイデガーの思索

の一貫性、換言すればその思索に通底する同一的なものを際立たせる行程であると同時に、ハイデガーにおける術語用法のあり方と、伝統的哲学に対する態度の原理性、即ち解釈の原理性への指示となる。

\*

## アウグスティヌス『音楽論』第六巻における「数」の認識について

北川 恵（本学博士後期課程）

本発表は、4～5世紀の教父哲学者アウグスティヌスの初期著作『音楽論』における「numerus 数」の認識について考察するものである。

アウグスティヌスは晩年に、生涯の著作を振り返って再検討した著作『再考録』（1-1）にて、初期の著作『音楽論』の考察を次のように言っている。「どのようにして、人は物體的な数や霊的な数から出発して、不変の真理そのもののうちに既に存在する変化しない数へと到達するか、および、どのようにして、かくて『神の、目に見えない本性が被造物を通して知られ、明らかに認められる』かという問題が論じられている」。ここからすれば、『音楽論』の探求の目的は「数」を手がかりにして超越的な存在を探求することにあつたとしてよいであろう。

他方で、当時流通していた「数」とは、同種の他の著作にあるように、詩学的な考察における特殊な概念であり、具体的には、鳴り響く音のもつ「リズム」乃至「韻律」の意味をもっていた。実際、アウグスティヌスの『音楽論』も、第一巻にて「音楽とは美事に調整する学である（*musica est scientia bene modulandi*）」と定義し、そこにリズムや韻律的な意味をこめているように思われ、それを実証するかのようにして、その後第五巻に至るまで、ほぼ詩学的な探求、つまり、様々な詩的韻律の形式（*spondeios, pyrrhichios* 等）についての議論が大半を占めていたのである。

ところが第六巻にいたって様相が一変するのである。すなわち、「数」が単にリズムや韻律の概念であることに留まらず、非物體的、霊的な概念にまで拡張されることになるのである。つまり、人間が不変の真理に到達する方法としての「数」の認識と、多様な「数」の存在論的位階秩序が論じられるのである。このように拡張された観点で見るとき、先に述べた定義もまた、音楽が世界全体の事物に対して「価値的な仕方で *modus*（測定、限界、調整、統制、秩序）を与える知的探求」であることを示すようにも理解され得るし、多様な「数」もまた感覚的で具体的なものから理性的で抽象的なものに至るまで通底している点で、共約的な概念として普遍性乃至超越性をもって理解され得ることが予想される。

以上の見通しのもとに、本発表ではまず、『音楽論』第六巻前半部分において展開される、錯綜した「数」論を解くための第一歩として、「数」の優劣が繰り返し検討し直される真の目的を明らかにすることを試みる。